

船中八策（峰章山）

航中龍馬思國窮 幕政愈危西與東  
夙示船中八策論 以之仰見夜明空

航中の龍馬 國窮を思う

解説 慶応三年六月、坂本龍馬は京都に上落していた前土佐藩主の山内容堂に対して大政奉還論を進言するため、土佐藩船の夕顔丸で長崎を出航し、洋上で参政の後藤象二郎に対して口頭で提示したものを、海援隊士の長岡謙吉が書きとめ成文化したとされている。

幕政愈危し 西と東と

語釈 ※航中⇨船が航路を行くこと。※国難⇨国家の危難。

※幕政⇨幕府の政治。※愈⇨ますます。より一層。※夙⇨ずっと以前から。早くから。※八策⇨八箇条の策。八箇条の案。

夙に示す 船中八策の論

通釈 土佐藩船の夕顔丸の船上、龍馬は国家の危機を思っていた。

幕府の政治が破綻寸前となり、西も東も動乱が続いている。以前から考えていた大政奉還論を早速、進言するため、八つの策を後藤象二郎に示した。そして委ね終えた龍馬は、気持ちも爽やかに夜明けの空を仰ぎ見るのであった。

之を以て仰ぎ見る 夜明の空